

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- さらなる進化をめざして
- 授業アンケート結果の分析の試み
「学生による授業アンケート」 質問
項目の詳細分析からわかること
- 「授業アンケート」に関するQ & A
- FD推進委員会の今後の活動予定

さらなる進化をめざして

駒澤大学FD推進委員会委員長
学長 池田 練太郎

本学のFD活動が開始されたのは2004年度である。私はその際設置された推進委員会の仏教学部選出委員としてメンバーに加わった。その時点においては、私を含め、多くの教職員が、FDという言葉の意味さえ十分に知らなかったのである。

それから2年、わずかの期間に駒澤大学のFDは驚くほどの成果を上げ、遅れ馳せで出発したにもかかわらず、今では他大学の活動に比肩しうるまでになった。これはひとえに小委員会の委員長である小野浩一先生をはじめ、委員の先生方や所管部署である総合企画室の職員の方々の情熱と献身的な仕事ぶりによるところが大きい。

FDは広い意味を持つ概念であり、本学のFDも今後、多面的な活動を展開してゆくことになるが、これまでは「学生による授業アンケート」を定着させることに相当の力を注いできた、と言えよう。授業アンケートは、その結果がフィードバックされ、実際に授業のあり方が改善されて初めて意味を持つものである。私自身も、この授業アンケートによって自分の欠点に気付かされたりして、それなりに良い方向で活用してきたつもりである。しかし、これを始めたことによって得られた最大の成果は、何よりも教員の意識に大きな変化をもたらされたことであろう。

ところで、その成果とは裏腹に、一方で学生の評価を気にするあまり、授業に向かう意識・姿勢がどこか窮屈なものになっていないか気になるのである。

いま日本の大学では、学生に対する教育・生活・就職などの支援をいかに充実させるかという点に比重が置かれ、研究活動の方はややもすれば二の次にされる傾向が見られるようになった。これは特に生き残りをかける私立大学としては、やむを得ないことなのかも知れない。しかし、いつの時代にも大学の存在意義は、やはり最先端の研究成果を直接学生に伝え、それによって高校までとは異なる高度な学識や批判精神を教授することにあってほしいと思う。駒澤大学のFDも、いまやそうした姿勢にも配慮した、質の高い目標を目指す時期に入ったのではないだろうか。

授業アンケート結果の分析の試み

「学生による授業アンケート」

質問項目の詳細分析からわかること

文学部教授 小野 浩一

(駒澤大学FD推進委員会小委員会委員長)

学生による授業アンケートは、教員が学生からさまざまなメッセージを受け取り、それによって日々授業の改善を図っていくところに大きな意味があります。駒澤大学FD推進委員会では、2004年度から授業アンケートを開始しました。アンケートの結果は現在のところ、評定値の分布と平均値のみを各教員へフィードバックするようになってきています。アンケート結果をどのように取り扱うか、教員へのフィードバックの方法と内容、さらに公開する場合の対象、範囲、内容等、今後検討が必要な問題です。FD推進委員会では、当初からこれらの問題の重要性を認識しておりましたが、まずは、諸活動を軌道に乗せることを優先的にいき、アンケート結果の扱いについては十分に検討するにはいたりませんでした。

アンケート結果は、詳細に調べるとそこから多くの情報が得られ、授業に効果的に利用できる可能性を含んでいるものだと思いますが、今のところ、各教員がそのような研究を行える状況にはなっておりません。そこで今回、業者から筆者の担当する科目のローデータを特別に提供してもらい、一教員の授業アンケート結果からどのような授業の姿が浮かび上がってくるかを調べてみることにしました。今後の議論のための一つの試みとしてご覧いただければと存じます。

1. 目的と方法

この試みの第1の目的は、各質問項目相互の間にどのような関連があるかを調べることで、そして第2の目的は、アンケート項目はどのような構造をもっているかを調べることで、具体的にはまず、各項目間の単純相関を調べました。その際、類似した項目が輻輳する相関関係を整理するために、一部について重回帰分析を行ってみました。次に探索的因子分析によって質問項目の因子構造を探り、各項目がどのような潜在変数によって説明しうるかを検討しました。

分析の対象となった科目は、筆者担当の心理学科2年必修

科目の「心理学研究法」(アンケート回答者78名)と1年次以上選択科目の「学習心理学」(アンケート回答者70名)の2科目(ともに講義科目)です。分析に用いた質問項目は、「はい・いいえ」で回答するQ11とQ14、それに自由記述のQ17を除いた以下の17項目です。Q1の出席率に関する項目は4段階評価ですが含めました。それ以外の16項目は5段階評価です。

- Q1 あなたの出席率は何%ぐらいでしたか
- Q2 履修にあたって「講義内容・授業計画」をよく読みましたか
- Q3 授業に熱心に取り組みましたか
- Q4 授業の難易度はどうでしたか
- Q5 「講義内容・授業計画」はわかりやすかったですか
- Q6 授業は「講義内容・授業計画」にそって進められましたか
- Q7 授業の進み方はあなたにとって適切でしたか
- Q8 教材・資料等は効果的に使われていましたか
- Q9 授業への取り組みには熱意が感じられましたか
- Q10 教え方はわかりやすかったですか
- Q12 教員の話し方の声量・速さは聞き取りやすかったですか
- Q13 板書やスライド等の資料提示は見やすかったですか
- Q15 この授業を友人や後輩に勧めたいと思いますか
- Q16 この授業についての全体的な満足度をお聞かせください
- Q18 教場は、この授業にあった広さでしたか
- Q19 雑音などがなく授業に集中できる環境でしたか
- Q20 この授業の教場の温度はちょうど良かったですか

注)5段階評価の意味は、

Q4は、
5:非常に難しい 4:やや難しい 3:ふつう
2:やや易しい 1:非常に易しい

Q7は、
5:速すぎる 4:やや速い 3:どちらともいえない
2:やや遅い 1:遅すぎる

その他の項目は、

5:強い肯定 3:中立 1:強い否定
になっています。Q7の「3.どちらともいえない」は、やや違和感があります。「ちょうどよい」あたりがいいかもしれません。

2. 科目による評価の相違

分析結果の説明の前に、同じ教員が担当している科目でもアンケート結果が異なるということを示します。受講者の内訳としては、「心理学研究法」は2年生が69名、あとは3年以上の重複履修者と学年不明者です。一方、「学習心理学」は1年生が48名、2年生7名、3年生以上6名、不明9名です。従って、重複履修者はあまりいません(注: データシートの上では、無記名なので氏名はもちろんわかりませんが、学年は記入されています)。

また、科目の特徴としては、「心理学研究法」は必修科目として観察や実験、調査などについて最低限の知識を理解する必要があるとともに実践的内容も多く含まれており、それほど難解ではありませんが、どちらかというとなり系の科目です。一方、「学習心理学」は専門の選択科目ですが、学生にとっては専門用語が多く難解な教科です。他大学でも教員がいかに「わかりやすい」授業にするか苦労している科目の一つです。

この2科目についての学生の平均評定値を代表的な項目で比較すると次のようになります。

	項目内容	研究法	学習	大学全体
Q4	授業の難易度はどうでしたか	3.6	4.3	3.6
Q7	授業の進み方はあなたにとって適切でしたか	3.2	3.5	3.2
Q10	教え方はわかりやすかったですか	3.7	3.2	3.4
Q16	この授業についての全体的な満足度をお聞かせください	3.7	3.5	3.5

この比較から、学生は「心理学研究法」に比して、「学習心理学」が著しく難しい(4.3)と回答していることがわかります。そして、「教え方のわかりやすさ」の評価も大学の全講義科目平均より低くなっています。ただ、「満足度」は大学の平均値レベルに留まりました。この結果は、「心理学研究法」の受講生が2年生以上であるのに対し、「学習心理学」は1年生が多いという学年差が影響している可能性もありま

すが、今回は比較するすべがありませんので不明です。

3. 項目間の相関関係

それでは本題に入り、項目間の相関関係を見ていきます。文末の表1に「心理学研究法」、そして表2に「学習心理学」の相関行列を載せました。統計的に有意な相関を持つ2項目関係が多数ありましたが、表ではそのうち+・0.50以上の値をゴシック体で強調しています。

Q18、Q19、Q20は施設についての設問なのでひとまずおくとして、それら以外の項目について見てみましょう。まず、他の項目と1つでも0.5以上の強い相関が認められた項目は、以下のとおりです。

心			Q5		Q8	Q9	Q10	Q12	Q13	Q15	Q16
学	Q3	Q4	Q5	Q7	Q8	Q9	Q10	Q12	Q13	Q15	Q16

(注) 心:「心理学研究法」 学:「学習心理学」

Q5、Q8、Q9、Q10、Q12、Q13、Q15の7項目は両科目に共通し、かつ相互に高い相関を有しつつ絡んでいる項目ですが、Q3、Q4、Q7の3項目は「学習心理学」に特有の現象です。詳細は表をじっくり見ていただければおわかりいただけると思いますので、ここでは、相関係数からわかる主要な特徴について列記してみます。はじめに2科目に共通の特徴から見えていきましょう。

(1)「オススメ度」(Q15)と「満足度」(Q16)は、すべての項目との相関係数が似通っています。つまり、学生の両項目に対する回答はほぼ同じであるといえます。

(2)「オススメ度」および「満足度」は、また、「教材・教具の効果的な使用」(Q8)、「教え方のわかりやすさ」(Q10)と高い相関がありますが、特に「教え方のわかりやすさ」とは両科目とも0.7以上の極めて高い相関があります。

(3)「教え方がわかりやすい」と回答した学生は、教員の「授業への取り組みに熱意を感じた」(Q9)、「話し方が聞き取りやすい」(Q12)の2項目にも高い評定値を与えています。さらに、「話し方が聞き取りやすい」は「板書や資料提示は見やすい」(Q13)との間に高い相関があります。

(4)「シラバスのわかりやすさ」(Q5)は、「オススメ度」や「満足度」と大いに関連しています。

(5)「出席率」(Q1)、「シラバスを読んだ程度」(Q2)、「シラ

バスに従った授業」(Q6)、の3項目は、全体として他項目との相関が低いようです。

次に、科目間の違いについて少し検討してみましょう。「心理学研究法」と「学習心理学」の相関分析における大きな違いは、「学習心理学」において、Q3、Q4、Q7で他項目との相関が見られたことです。

(6)Q3はQ8、Q10、Q15、Q16と高い相関関係がありました。

Q3「授業に熱心に取り組んだ」と答えた学生は、「教材資料」は効果的に使われており、「教え方」はわかりやすく、そして「満足度」が高く、他の人にも「勧めたい」と答えているのです。そこで、データを別の角度から、「授業に熱心に取り組んだ」(Q3)に高い評価(5と4)で回答した学生(22名、平均評定値4.3)と低い評価(3、2、1)で回答した学生(48名、平均評定値2.5)の代表的な項目の平均得点を比較すると次のようになりました。

	熱心に取り組んだ	取り組まなかった
Q8(教材資料)	4.4	3.5
Q10(教え方)	4.0	2.8
Q15(オススメ度)	4.3	3.1
Q16(満足度)	4.4	3.1
Q4(難易度)	4.0	4.5
Q7(授業の速さ)	3.3	3.6

ちなみに、両群ともQ9の教員の「授業への取り組みに熱意を感じた」への回答は、4.5および4.2となっています。どちらの学生も教員の熱意は感じ、授業の進度もそれほど速いとは感じていないが、両者とも内容はかなり難しいと回答しています(取り組まなかった学生は4.5と特に高いですが)。ところが、熱心に取り組んだという学生は、教材資料は効果的で、教え方もわかりやすく、満足感を持っているが、取り組まなかったと答えた大半の学生は教え方がわかりにくく、不満足であると答えています。相関関係は因果関係ではありませんから、熱心に取り組まなかったという学生は、逆にどうにもついていけなかったがためにやる気を失ったのかもしれませんが、つまり、2005年度の「学習心理学」の授業は、一部の「できる」学生は理解と満足感を得ることができたが、多くの学生は、「先生は一生懸命やっているようだけど、私には難しすぎてついていけな

い」ものだったということになります。

ただ、この結果には思い当たる明確な原因があります。実はこの講義は2004年度までは、当日の講義内容をある程度まとめたプリントを配り、授業の中でさらに追加の板書や資料を提示しながら一つ一つのテーマをある程度時間をかけて話すというやり方でした(従ってアンケートの評価も高いものでした)。しかし2005年度は、教科書を使用し、また、各単元のレジュメを配布したために、わからないところは「教科書やプリントをよく読むように」と省略し、授業では難しい内容をてんこ盛りで提供することになりました。毎回、学生の反応を聞き、「ここがわからない」というところは何回も説明するようにしたのですが、多くの学生にとっては消化不良で終わったようです(授業中、多くの学生の目が虚ろだったことがそれを物語っています)。このように、授業のやり方がストレートに「授業アンケート」に反映されるということは、アンケートにはそれなりの信頼性があることの証しともいえるのですが、ともあれ、これからの授業を考える上で貴重な情報になりました。

(7)もう一点、「学習心理学」ではQ4の「難易度」とQ7の「授業の速さ」の間に高い相関が認められました。つまり、全体的に見て、難易度が高いと感じている人は、授業の進み方も速いと感じていたわけです。

4. 重回帰分析による検討

これまで見てきた項目間の単相関では、一群の項目同士が相互に関連しあっていることがわかりました。このことは、複数の項目が相互に関連しあってお互いの相関係数の値を高めているともいえます。そこで、そういった相互の影響を割り引いた上で、たとえば、「教え方のわりやすさ」(Q10)と最も関連している(あるいはQ10を予測できる)項目はなんだろうかということを調べて見ることにしました。重回帰分析を行えばそれがわかります。ここでは、例として「学習心理学」のQ16「満足度」、Q10の「教え方」、Q4「難易度」についての重回帰分析の結果を記します。

(1)「満足度」(Q16)については、単相関ではQ3、Q5、Q8、Q9、Q10、Q13、Q15の7項目に0.5以上の相関がありましたが、重回帰分析によって、そのうち特にQ10の「教え方のわかりやすさ」($p < .01$)、およびQ3の「熱心に取り組む」、Q15「オススメ度」(ともに $p < .05$)が強い相関関係を持ってい

ることが明らかになりました。従って、Q10 あるいは Q3、Q15 の値が高ければ、Q16 の満足度は高いということをより確かに推定することができます。つまり、教員が、「わかりやすい教え方」をし、学生が「熱心に授業に取り組んだ」と自覚していると、「満足度」が高いことが予測できるわけです。

(2)次に、Q10「教え方のわかりやすさ」については、単相関ではQ3、Q8、Q9、Q13、Q15、Q16の6項目が0.5以上の相関を持っていましたが、重回帰分析では、Q10の「満足度」($p<.01$)とQ8「教材資料の効果的使用」($p<.05$)の2項目が有意な相関を持っていました。つまり、学生の授業に対する「満足度」が高ければ、「教え方のわかりやすさ」も高い、また、「教材資料が効果的に使われている」授業は「教え方がわかりやすい」と評価されるということがいえます。

(3)一方、難易度(Q4)についてはどうでしょうか。難易度は単相関では、Q7「授業の速さ」とのみ0.5以上の相関がありました。重回帰分析の結果はQ7($p<.01$)およびQ8「教材資料の効果的使用」($p<.05$)の2項目と強い関連性が認められました。従って、「教材資料を効果的に使用」して「ゆっくり」と説明すれば、学生は授業を「易しい」と回答することが予測できます。

5. 質問項目間の因子構造

最後に少し専門的になりますが、アンケート用紙の各項目がどのような構造になっているかを調べるために主因子法による探索的因子分析をやってみました。表3にバリマックス回転後の因子負荷量を示します。因子構造および因子負荷量は、当然、適用するデータ、因子数によって変わりますが、ここでは「学習心理学」の4因子解を簡単に述べることにします。表では0.49以上の因子負荷量を持つ数値をまとめ因子ごとに四角で囲んであります。

(1)第1因子：教員要因

第1因子に含まれるのは板書(Q13)、話し方(Q12)、教員の熱意(Q9)、オススメ度(Q15)、教材資料(Q8)の5項目で、主に教員や授業方法に関するものになっています。

(2)第2因子：学生要因

第2因子は、授業への(学生の)取り組み(Q3)、満足度(Q16)、シラバスの理解(Q5)、教え方への評価(Q10)等、主

として学生側の姿勢や判断を問う項目から構成されています。

以上の第1因子と第2因子は科目や推定する因子数によって微妙に変化していますが、次の第3因子と第4因子は、どのような計算をしても安定して抽出されました。

(3)第3因子：施設設備因子

第3因子は、Q18「教場の広さ」、Q19「集中できる教場」、Q20「教場の温度」の3項目で、これら3項目はいわゆる授業そのものとは独立した項目群であることがわかります。相関行列を見ても他の項目とそれほど高い相関関係は認められていませんでした。この結果はおそらく、学習心理学で用いた教場(1-202)に大きな問題がなかったからだと思います(たとえば、Q18広さの平均評定値4.01)。もし、小さい教場に多人数が押し込められたような状態の場合には、「熱心な取り組み」や「満足度」に影響が出る可能性があります。

(4)第4因子：講義様態(難易度と速度)因子

第4因子は、Q4の「難易度」とQ7の「授業の進み方」に関する2項目からなっています。すでに述べたようにQ4とQ7は強い相関関係(難しい=速い、易しい=ゆっくり)がありますが、その他の項目とは比較的独立していることが明らかになりました。

6. おわりに

以上、「学生による授業アンケート」の質問項目間の関連とその構造について簡単に述べてきました。結果は、文学部の一教員が担当する2講義科目のデータに基づいたものですが、この中のあるものは他の授業カテゴリや他の教員の科目にも共通する一般的な傾向である可能性がありますし、また、あるものは、学部や学科、教員、学生の特性に依存したやや特殊なものかもしれません。そして、分析の方法についても、ここで用いたものの他にもっと興味深いさまざまなものも考えられます。

このように豊かな情報を内包した授業アンケートの結果をどのように活用していくべきかについて、今後実りある検討がなされることを期待したいと思います。

表1 心理学研究法 項目間相関行列 (ゴシック体は相関係数が±0.5以上のもの)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q12	Q13	Q15	Q16	Q18	Q19	Q20
Q1	1.00																
Q2	0.19	1.00															
Q3	0.31	0.39	1.00														
Q4	0.15	0.03	-0.02	1.00													
Q5	0.16	0.40	0.36	0.03	1.00												
Q6	0.13	0.25	0.04	0.02	0.28	1.00											
Q7	-0.09	-0.16	0.10	0.27	-0.13	-0.04	1.00										
Q8	0.15	0.19	0.37	0.06	0.31	0.31	0.11	1.00									
Q9	0.15	0.19	0.31	0.24	0.25	0.25	0.28	0.55	1.00								
Q10	0.14	0.15	0.34	-0.17	0.38	0.21	0.08	0.57	0.56	1.00							
Q12	0.12	0.21	0.23	0.00	0.24	0.12	0.18	0.52	0.55	0.55	1.00						
Q13	-0.10	0.21	0.15	-0.12	0.03	0.13	0.03	0.49	0.36	0.45	0.55	1.00					
Q15	-0.07	0.34	0.38	-0.09	0.61	0.26	0.03	0.56	0.36	0.54	0.46	0.45	1.00				
Q16	0.10	0.28	0.40	0.02	0.47	0.26	0.03	0.67	0.48	0.70	0.54	0.45	0.68	1.00			
Q18	-0.03	-0.06	-0.01	0.03	-0.14	0.15	0.08	0.09	0.23	0.11	0.17	0.05	-0.01	-0.06	1.00		
Q19	-0.04	0.02	0.04	0.08	0.01	0.14	-0.10	0.04	0.08	0.12	0.06	0.21	0.09	0.08	0.44	1.00	
Q20	-0.09	-0.01	-0.05	0.09	0.15	0.20	-0.09	0.13	0.02	0.13	0.18	0.14	0.32	0.11	0.52	0.59	1.00

表2 学習心理学 項目間相関行列 (ゴシック体は相関係数が±0.5以上のもの)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q12	Q13	Q15	Q16	Q18	Q19	Q20
Q1	1.00																
Q2	0.15	1.00															
Q3	0.29	0.38	1.00														
Q4	-0.06	-0.12	-0.36	1.00													
Q5	0.17	0.49	0.44	-0.07	1.00												
Q6	0.12	0.30	0.35	-0.14	0.46	1.00											
Q7	-0.01	-0.09	-0.13	0.52	0.09	-0.04	1.00										
Q8	0.21	0.26	0.51	-0.06	0.41	0.47	-0.12	1.00									
Q9	0.13	0.31	0.26	-0.23	0.45	0.35	-0.16	0.43	1.00								
Q10	0.20	0.36	0.61	-0.42	0.46	0.43	-0.28	0.62	0.51	1.00							
Q12	0.10	0.11	0.23	0.01	0.33	0.38	0.02	0.47	0.51	0.30	1.00						
Q13	0.28	0.25	0.37	-0.09	0.44	0.25	0.04	0.49	0.56	0.58	0.50	1.00					
Q15	0.12	0.32	0.57	-0.35	0.45	0.38	-0.26	0.58	0.51	0.75	0.39	0.58	1.00				
Q16	0.27	0.34	0.67	-0.39	0.52	0.42	-0.24	0.58	0.55	0.82	0.34	0.60	0.80	1.00			
Q18	0.05	0.26	0.08	0.16	0.25	0.33	0.09	0.36	0.34	0.22	0.23	0.21	0.39	0.27	1.00		
Q19	0.18	0.35	0.22	0.08	0.34	0.39	0.05	0.33	0.30	0.34	0.35	0.34	0.38	0.34	0.38	1.00	
Q20	-0.09	0.19	0.04	0.07	0.32	0.18	0.03	0.23	0.23	0.27	0.24	0.26	0.29	0.21	0.41	0.31	1.00

表3 学習心理学因子分析結果

(バリマックス回転後因子負荷量)

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
Q 13	0.74	0.33	0.16	-0.01
Q 12	0.61	0.09	0.27	0.06
Q 9	0.55	0.16	0.35	-0.22
Q 15	0.51	0.36	0.39	-0.44
Q 8	0.49	0.37	0.35	-0.13
Q 3	0.19	0.75	0.09	-0.29
Q 16	0.49	0.56	0.27	-0.43
Q 5	0.25	0.49	0.45	0.01
Q 10	0.46	0.49	0.29	-0.48
Q 18	0.19	-0.01	0.66	0.07
Q 19	0.24	0.23	0.50	0.08
Q 20	0.20	-0.06	0.53	0.01
Q 4	-0.03	-0.19	0.12	0.75
Q 7	-0.01	0.04	0.03	0.67
Q 1	0.15	0.38	-0.04	0.04
Q 2	-0.01	0.42	0.44	-0.11
Q 6	0.22	0.32	0.43	-0.09

「授業アンケート」に関するQ&A

授業アンケートに関して、FD推進委員会に対して様々なご意見ご質問をお寄せいただいております。FD活動の改善に向けてのご意見・ご要望については、真摯に受け止め委員会における検討材料とさせていただきます。今号では、現行の授業アンケート実施方針についてのお問い合わせ4件について、お答えさせていただきます。

Q1 授業アンケート結果の公開について、駒澤大学FD推進委員会はどのような方針を持っているのでしょうか。

A1 駒澤大学における「学生による授業アンケート」は、現在、その結果を当該教員本人にのみ還元するという方針をとっております。すなわち、授業アンケート結果として集計されたデータや学生の意見については、個々の教員が自分自身で授業改善に役立てるという用途に限定し、FD推進委員会ないし大学当局がそれを閲覧することはありません。

なお、学部単位、学科単位での平均値(たとえば学部・学科間の比較データ)等については、FD NEWSLETTER やホームページを通じての公開を実施しており、今年度のアンケート結果についても同様の方針を持っております。

とはいえ、授業アンケートの結果は、本学の在籍学生や教職員への情報公開を推進させていくことは、もちろん、大学のFDへの姿勢を示す指標として、あるいは大学自体に対する社会的評価向上のため、学外の受験生や社会に対しても発信していくことがますます求められるようになってきています。駒澤大学の現状は以上のとおりですが、今後の公開方針についてもこれから真剣に検討していかなければならないと考えております。(なおこの問題については、FD NEWSLETTER 第6号もご参照ください。)

Q2 20人以下の講義科目や、演習・集中科目が授業アンケート対象から除外されているのはなぜなのでしょう。

A2 授業アンケート対象項目としてはある程度の人数がいる講義科目、実習科目、実技科目などを前提に、実施方法・質問項目が作成されており、そのモデル以外の様々な授業形態を想定した項目になっておりません。たとえば、ご指摘の演習科目や履修登録者が20人以下のような小人数の講義科目の場合、学生一人一人とのコミュニケーションもより密であり、学生側の感じる距離感もまた異なるなど、通常の講義科目とは異なる性質があると考えられます。このような事情から、授業アンケート対象科目をある程度受講者の多い科目に限定しています。

集中科目についても、短期間での授業という形態を十分考慮した質問項目になっていないことから、対象科目としては除外しています。

ただし、担当科目が演習・小人数科目のみしかないようなケースでは、(アンケート結果が教員個人の利用にのみ限定されていることにも鑑みて)全く授業アンケートの機会がなくなってしまうことのないよう、そうした科目であっても授業アンケート実施をお願いいたしております。

Q3 教場の広さなど、教員の責任ではない項目が授業アンケートにあるのはなぜですか。

A3 Q1でお答えしましたように、現在、授業アンケート結果は当該授業の教員個人に対してのみ還元されています。したがって、教場等の施設に対する評価項目も、(教員自身に対する学生の評価と同じく)教員個人の参考資料にしてもらうために設けられております。たとえば、当該授業に対する満足度が低かった場合に、それが教場の不適切さに原因がある場合なども考えられます。

こうした設備面への不満を、FD推進委員会を通じて教務部などの授業関係部局に伝えるという活用も必要だと思われるのですが、現状ではなされておられません。この点は今後の課題と考えますので、皆様からご意見をいただければ幸いです。

Q4 半期科目では授業アンケートの実施時期が早すぎて、十分な授業が行われない内に実施されているように思います。実施時期はどのように決めているのですか。

A4 確かに、授業アンケート結果に基づいて授業内容の改善を図るとすれば、具体的には次年度以降のことになるかと思えます。その意味では授業最終日に実施ということも考えられます。

しかし、授業アンケートに答えてくれた学生へのフィードバックが必要だと考える先生方もたくさんいらっしゃいます。たとえば、結果をコピーして学生に配布し、コメントを加える先生がおられます。このような機会をとらえて、先生ご自身の授業に対する考え方などを学生に伝えて戴くことは、学生の授業態度改善への効果もあるかと思えます。

授業アンケート実施の時期については以上の点も考慮して、結果の報告が授業最終週に間に合うよう日程を組んでおります。

FD推進委員会の今後の活動予定

2006年度「学生による授業アンケート」実施スケジュールについて

前期：平成18年6月19日(月)～6月24日(土)
(実施済み)

後期：平成18年11月8日(水)～11月14日(火)

平成18年度第2回小委員会

平成18年7月3日(月)

FD活動についてご意見がありましたら各学部等の小委員会委員までお申し出ください。

編集後記

平成16年度に発足したFD推進委員会の活動も3年度目を迎えたが、発足時から継続して活動歴が3年目になる委員も多い。その一員である今号の編集委員にとっては、初年度の委員会および小委員会で一緒にさせていただいた池田先生から、今回、学長としてFD推進委員会委員長として巻頭言をいただくことができたことは、光栄であるのみならず、たいへん感慨が深い。お話の内容も、とかくFDというかけ声のみに酔いがちな我々委員にとって、立ち止まってその本質・本旨を考えさせていただくためのよい機会を与えていただいた。

さて、3年目ということは、一般的にも制度の一応の完成年度を迎えるということをも意味するであろう。授業アンケートにしてもその他のFD活動にしても、とりあえず「やってみる」を重視してここまで来たような気がするが、そろそろ「やってみた」ことの反省をふまえて、次のステップに向けた準備を始める時期でもある。その意味で、今回、小委員会発足以来リーダーを務めてこられた小野先生の「論考」は、これまでの駒澤大学のFD活動を一つの蓄積として生かす提案であると思う。

以上の二大コンテンツによって、既往の活動報告にとどまらない、FD前進のための実際の契機・素材を掲載できたことを、本号の編集委員としてうれしく感じている。

(高橋洋城、岩崎 皇)

【タイトル横の写真：梅檀の花と図書館】

FD NEWSLETTER Jun.2006 第7号

発行日：2006年6月30日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

03-3418-9867 Fax 03-3418-9037

(事務局：総合企画室)